

父・祖父の足跡を辿る旅

—なぜ祖父はダンスパレスを経営したのか—

加藤のり子

石田美奈子

(記録) 桃谷和則

加藤のり子・石田美奈子姉妹は、戦前に尼崎に所在したダンスパレスの経営者である平井正夫氏の孫である。

阪神・淡路大震災の翌年、正夫氏の長男で、お二人の父



インタビューに答える加藤さん(右)と石田さん(左)

である平井英雄氏が亡くなり、英雄氏がどのような人生を送ってきたのかを知りたい、そのためには父の人生に強い影響を与えた祖父正夫のことも知らなければならぬとの思いから、今から約二〇年前に正夫・英

雄父子の足跡を辿るため、お二人で資料を調べ、各地を訪ね歩く調査を開始された。

この記録は、令和四年(二〇二二)五月一七日に尼崎市立歴史博物館で行われたお二人へのインタビューを元に、お二人が行われたファミリーヒストリーを辿る調査、特にダンスパレスに関する調査について、お二人のご理解を得てまとめたものである。(桃谷)

1 正夫・英雄父子の歩みを調べるきっかけ

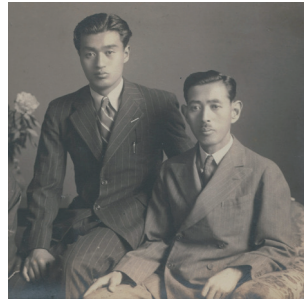
平井家は江戸時代後期から姫路城下において木綿問屋

を営んでいました。屋号を「八百善」と言いました。祖父の正夫はその四代目にあたり、姫路城下博労町（現在の姫路市博労町）に屋敷がありました。正夫は幼少時から音楽が好きで、大正一四年（一九二五）には屋敷地内に音楽堂「ヴィラ・ソリタリア」を建設するほどでした。

私たち姉妹は姫路に平井家があったころのことは全く知りませんし、父もほとんど姫路のことを話すことはありませんでしたが、祖父が残したたくさんの写真には音楽堂など姫路時代の写真が多数有り、子供のころからそれら写真の存在のことは知っていて、その中に尼崎のダンスパレスの写真があったことにも気づいていました。

父は戦争で財産をすべて失い、戦後、大変苦勞をして裁判所調査官となり、堅実な人生を送りましたが、洋楽が大好きで、この点は祖父の強い影響があったのだと思います。ただ、私たちにとって祖父は音楽のためにお金を散財した人というイメージしかありませんでした。

阪神・淡路大震災の翌年、平成八年（一九九六）三月、父が逝去しました。これを契機に、私たち姉妹は、父がどのような思いをしながら生きてきたのかを知りたいと



平井正夫氏（右）と英雄氏（左）
（平井英雄氏旧蔵写真より）

歩みを知るためには、父の人生に大きな影響を与えたであろう祖父のこと、特に祖父と音楽との関係を調べる必要を感じていました。

2 祖父正夫とダンスパレスとの関わりを調べる

祖父はロシア人ヴァイオリニストのミハイル・ウエクスラー⁽¹⁾に師事したヴァイオリニストで、同門には貴志康一⁽²⁾がいました。また、その時期日本で初めて私費で交響楽団をつくりました。結婚の際には山田耕筰夫妻が仲人を務めており、多くの著名音楽家と交流があったことがわかっていきます。まさに「音楽人生」を歩んだ祖父

の強い念に駆られ、父が残した僅かな資料を頼りに、資料を調べ、数々の現場を自分たちで歩いて調べ回ることをはじめました。そして、父の

でしたが、なぜクラシック音楽を純粋に愛していた祖父が、尼崎でダンスホールの経営をしていたのかが不思議で、その理由を知りたいと考えていました。平成一五年（二〇〇三）頃だったと思いますが、たまたまインターネットでダンスホールのことを検索していたら、関西大学社会学部にダンスホール研究の第一人者である永井良和教授がおられることを知りました。そこで、永井教授に思い切って連絡し、ダンスパレス経営者の平井正夫の孫であり、正夫が残したダンスパレスの写真や資料が当家にあることをお伝えしましたところ、永井教授は大変関心を持たれ何度かメールでやりとりをするようになりました。永井教授からは、当家の写真や資料は大変貴重なものであるとご評価いただき、「ダンスホール」というと何か風俗産業的なイメージを持たれるかもしれないが、戦前のダンスホールは純粋に社交ダンスを楽しむ場でした。また、西洋音楽普及の場でもあり、戦後も活躍する数々の音楽家がダンスホールから巣立っていますので、おそらく正夫氏は自身の財産を音楽に関わる事業に投資したいとの思いから、ダンスホール経営に乗り

出したのではないでしようか。」とのご意見をいただきました。祖父とダンスパレスとの関わりについては、まだまだ分からないことが多いのですが、永井教授のご意見を得て、祖父がなぜダンスホール経営に取り組んだのか、その理由の一端がわかったと思えました。また、昭和一五年（一九四〇）に国から全国のダンスホールに閉鎖命令が出た際、ダンスパレスでは『わすれな草』という解散記念写真帖を作成し従業員らに配布していることや、ダンサーらの従業員をホールに集めてお別れ会を行っている写真が、祖父が残したダンスパレスの写真の中に含まれていることを永井教授にお伝えしたところ、永井教授からは、「ダンスホール閉鎖時に記念写真帖を



『わすれな草』に貼付されたダンサーらの集合写真

作成し、お別れ会を行っている例はダンスパレスだけだと思います。経営者の平井正夫氏が従業員を大切にしていたことがわかります。」とのご指摘もいただき、祖父は家族主義的なダンスホール経営を行っており、ダンサー等の従業員をとっても大事にしていたことを知りました。そして、音楽にお金を散財した人というイメージとは違う祖父像が浮かび上がってきました。



ダンスパレス解散時のお別れ会(平井英雄氏旧蔵写真より)

3 尼崎モダンニズム展への協力

平成二二年(二〇一〇)、尼崎市教育委員会主催で「尼崎モダンニズム展」という展覧会が開催されることになり、永井教授から、同展覧会を担当される尼崎市教育委員会の桃谷和則学芸員をご紹介いただきました。そし

て、石田宅で、永井教授、桃谷さんと私たち姉妹の四人が集まり、同展覧会に当家所蔵の写真や『わすれな草』を出展させていただくことになりました。初めて一般公開された当家のダンスパレス資料は、同展覧会の展示資料の目玉となり、新聞紙上でも「戦前、華麗ダンスホール」「華やか 踊る尼崎」「工都彩った尼崎」などの大見出しと共に、写真入りで大きく紹介していただきました。私たち二人が地道に取り組んで来たファミリィヒストリーを辿る努力の一端が報われたように思いました。また、桃谷学芸員から、同展覧会をダンスパレスの最後の支配人の御子息が観覧され、その方の家にもダンスパレスに関する資料があるとの情報をいただきましたので、桃谷さんと私たち姉妹でその方のご自宅まで赴くことになり、御子息の方と懇談させていただくと共に、同家で保管されているダンスパレス資料を見せていただきました。その方とはその後も連絡を取り合っています。

4 『ノスタルジア 遙か遠き日々々の記憶』の出版

平成二七年（二〇二五）、石田が執筆し、加藤が監修して自費出版『ノスタルジア 遙か遠き日々の記憶』を出

版しました。歴史を調べることも、人を訪ねてむかしの話を聞くことも、そしてその成果を本として刊行することも何もかもが初めてのことで、途中で挫折したことも何度かありましたが、たくさんの方々のご協力を得て、また永井教授らのアドバイスをいただきながら、十数年の歳月を掛けて解き明かしてきた我が家のファミリーヒストリーを一冊の本にまとめることができました。発行できたときには、肩の荷が降りた気分でした。

いつの間にか、私たち姉妹も人生を振り返る世代になりました。私たちの子供世代にとっては、今は生活していくことで精いっぱいなので、自分の家の歴史、先祖の歴史を知ることにはあまり関心はないかもしれませ



『ノスタルジア 遙か遠き日々の記憶』

んが、祖父が残した古い写真や資料は、将来、自分が引き継ごうかなと考え始めてくれているようで

す。とても嬉しいことで、本をつくった甲斐があったと思いました。

〔注〕

(1) ミハイル・ウエクスラー（生没年不詳）は、ロシア革命後、日本に亡命したロシア人ヴァイオリニスト。神戸の北野に居住し、個人教授で生計をたてながら音楽活動を行っていた。平井正夫は、ウエクスラーに師事すると共に、ウエクスラーの音楽活動への経済援助を行っていた。昭和一〇年代にアメリカに渡り、昭和三〇年代にはサンフランシスコで音楽学校の教授や指揮者をしていくことが平井家資料から判明している。

(2) 貴志康一（一九〇九—一九三七）は、「天折の天才」と称される音楽家。芦屋市在住であった一四歳の時にミハイル・ウエクスラーに師事してヴァイオリンを学び、旧制甲南高等学校中退後、三度にわたりヨーロッパに留学し、ヴァイオリニスト・作曲家・指揮者として活躍した。帰国後も新交響楽団（現NHK交響楽団）指揮者などとして活躍していたが、昭和二二年（一九三七）、二八歳の若さで急逝した。